OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラオスにおける伝統的寺院建築の形態構成に関する研究
Author(s)	Chithpanya, Soukanh
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44908
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏名	CHITHPANYA SOUKANH（チッパンニャー スーカン）
博士の専攻分野の名称	博士（工学）
学位記番号	第 18748 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻
学位論文名	**ラオスにおける伝統的寺院建築の形態構成に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教授 吉田 勝行 （副査） 教授 舟橋 國男　教授 柏原 士郎　助教授 阿部 浩和

論文内容の要旨

本論文は、ラオス及び同じテラワダ仏教を信仰するタイ中北部における寺院建築を取り上げ、そのブッタシマの形態を比較分析することで、ラオスにおける寺院建築の形態構成に関する伝統を明らかにすることを目的としており、全5章から成り立っている。

第1章は序論で、本論文の目的、背景、及び関連する既往研究についての概要を記述し、本研究の位置付けを行っている。

第2章では、ラオスとタイ中北部の都市における109件の伝統的寺院を調査し、そのブッタシマの平面形態を構成する要素を地域ごとに分析することで、「側面、前面での柱と壁の取り合い」や「側面の柱の断面形状」、「ホンクアン（奥行方向）の柱間の数」などの特性を求めると共に、それらを説明変数とすることにより、数量化II類を用いてラオスとタイ中北部の寺院建築を明確に判別できることを明らかにしている。

第3章では、ラオスのルアンプラバン、ヴィエンチャンとタイのチェンマイにおける伝統的寺院建築のファサードを特徴づける屋根勾配及び軒下のKhaen Nangの形態に着目し、その曲線を計測比較して、屋根勾配の曲線形態は3地域で大きな差が見られず、Khaen Nangについてはその曲線形態が寺院毎に異なるところから、ラオスとタイ中北部の伝統的寺院建築の外観を識別する要素にならないことなどを明らかにしている。

第4章では、伝統的寺院建築のペディメントや出入口の扉に多く描かれている装飾モチーフを取り上げ、ラオス及びタイ中北部の寺院建築を対象に、その部分に見られる特徴的な曲線形態の丸みをラウンドネスにより計測することで、ラオスのKarn Laiの内側における曲線は、タイに比べて丸みが大きいこと、Bark Laiに関する曲線は、その計測部分にかかわらずラオスとタイの間で大きな差は見られないこと、ラオスのNhord Laiの上側における曲線は、タイに比べて丸みが大きいことなどを明らかにしている。

第5章は結論で、本研究で得られた主要事項の要約を行い、ラオスにおける伝統的寺院建築の形態を構成するための要件として取り纏め、提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ラオス建築の形態に関する伝統を明らかにすることを目指し、ラオス及びタイ中北部のテラワダ仏教寺院の形態に見られる特徴的な曲線や、平面型を比較分析することで、ラオスの寺院建築の伝統的な形態に関する特性を見出そうとしている。その主な成果は次の通りである。

(1) ラオス及びタイ中北部の寺院におけるブッタシマ（本堂）の平面型について、タオシム（本陣）のホンロイ（間口方向）の柱間の数が３である場合が75%で最も多く、ホンクアン（奥行方向）の柱間の数は４～５である場合が全体の半数を占め、タオシムの間口x（m）と奥行y（m）の関係は、$y=2.2456x-0.6303$という式で表される。

(2) テラワダ仏教寺院建築におけるブッタシマの「側面、前面での柱と壁の取り合い」や「側面での柱の形状」、「ホンクアンの柱間の数」などを説明変数とすることで、ラオスとタイ中北部の寺院建築が数量化Ⅱ類により、明確に判別できる。

(3) ラオス及びタイ中北部における仏教寺院のファサードの形態を特徴づける屋根勾配及び軒下のKhaen Nangの曲線形態を計測比較した結果、屋根の曲線形態については大きな差はなく、またKhaen Nangは寺院ごとに異なることから、これらはいずれもタイとラオス北中部の寺院建築の外観を識別する要素にならない。

(4) 仏教寺院のペディメントや扉などに見られる特徴的な装飾を構成する曲線についてラウンドネスを実測した結果、ラオスのKarn Laiの内側における曲線は、タイに比べて丸みが大きく、またNhord Laiの上側における曲線は、タイに比べて丸みが大きい。

以上のように、本論文はラオスの伝統的寺院建築の修復保存を実施して行く上で必要な形態上の特徴を、地域的に隣接するタイ北中部の寺院建築の形態と明確に識別する要件を明らかにすることで提示しており、建築計画学、特に建築形態工学の研究の発展に寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。